Nothing

桐 紅丘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎｏｔｈｉｎｇ

【Ｎコード】
Ｎ１８３９Ｖ

【作者名】
桐　紅丘

【あらすじ】
奏は男兄弟に囲まれて育った男勝りな女子高生。
入学直後、からんできた男子生徒３人を病院送りにした奏と関わる男子は、兄と兄の親友の遊さんだけ。
勝ち気でストレートな彼女にとって、優等生で表情の読めない彼は苦手な存在……のはずだった。

とくいじゃない（前書き）

登場人物

・奏（かなで）

・遊（ゆう）

・麗（れい）

・天翔（たかと）

とくいじゃない

「奏」

低い掠れたような声が聞こえて、振り向いた先には本を片手にした遊さん。
彼はこんなうだるような熱さにも関わらず、涼しげな澄ました顔をしている。

「何？遊さん」

彼は私の兄・天翔の親友で、いつも兄といるせいか、私のことを呼び捨てで呼ぶ。
そんな彼に私もセンパイをつけるには抵抗があり、さん付けにさせてもらっている上、多少のタメ口は多めに見てもらっている。

「これ。この前言ってた本」

彼は手に持っていた一冊のハードカバーを私の腕に載せる。
その題名を見て、以前彼から借りる約束をしていた小説だと気付いた。

「ありがとう。でも、天翔に渡してくれればよかったんだけど」

彼を見上げれば、銀縁の眼鏡の奥に光る冷たい瞳が私を捉える。

「アイツは授業終わり次第早々に部活に行った。俺もこれから、生徒会だから」

別に放課後に渡そうとしなければいいのでは、と思ったが口には出さない。
彼は忙しいから。
なんせ生徒会長。
だいたい私に関する用事なんて、放課後まで忘れていても仕方ない。

「忙しいのに、わざわざありがとう。それじゃ」

私は早々に遊さんから離れる。
無口無表情な彼と話すことは少ないし、何より私たち二人を見る目が痛い。
彼は生徒会長であることを抜いても目立つ人間なのだ。
成績は学年トップで、運動だってできる。
愛想はないが、何よりその整った美しい顔は女子によくモテる。
やたらと愛想を振り撒く運動しかできない野球馬鹿の天翔と我が校の女子の人気を二分していると言っても過言ではない。
そんな彼と私が一緒にいても文句を言われず、視線だけの批判を受けるのは、ひとえに天翔の妹であることと、私が入学当初に絡んできた不良三人を一人で病院送りにしたためだ。
それでも悪意ある視線を受けて心地好い訳ではないので、遊さんと関わる時には、『手短に』がモットーだ。

横で待たせていた友人の麗を促し、廊下を進む。
後ろから遊さんらしき視線を感じるが、もう振り向かない。
しばらくすれば去るだろう。
私は麗と共に角を曲がった。

「ねぇ、奏は真田センパイのことどう思ってるの？」
やたらと色気を持つ麗が形のいい指を顎に当てながら、聞いてきた。
あの後私たちは駅前のカフェに移動し、お互い好きなケーキと飲み物を楽しみながら、会話に耽っていた。
「どうって、別に」
麗は美人で女らしい。
ラブラブな彼氏がいるせいか、周囲の女子のように遊さんや天翔に恋愛的興味はないらしい。
「なぁに、その答え。好きなのか聞いてるの」
麗は私の回答に不満げに口を尖らす。
そんな仕種すら様になるのだから、男は簡単に落ちるだろう。
「好きかって……別に普通。ただあの人は得意じゃない」
人間誰しも苦手な相手がいるものだ。
私にとっては遊さんだ。
無口無表情な彼は、感情を読み取りにくい。
ストレートに言われないとわからない私には彼の少ない言葉や多少の表情の変化だけでは何を思っているのかわからない。
だから、あまり彼のことが得意ではない。
「ふうん……つまんないの」
この女は！

相変わらず人をだしに使うのが好きらしい。
私の近くに男の影があるととりあえず恋愛感情を問い質してくる。
短い付き合いではないので慣れっこだが、コイバナ好きは普通の女子と変わらない。

「つまらなくない。アンタは、人のことをネタにし過ぎ。たまには自分のことをネタにしろ」

私の答えに、麗は口に運びかけていたフォークを止めると、ニヤリと私を見上げた。

「な、何？」
「いいのぉ、私のこと話しても？奏じゃついてこれないような濃い話するわよ」

やたらと色気を含んだ物言いに思わず体を引いてしまう。

「やっぱいい！」

私の反応に麗はニコリと笑う。

「冗談よ。アンタのカワイイ赤面顔を拝んでもいいけど、ほとんどついてこれないだろうし。私と早良（さわら）は相変わらずラブラブよ」

だから、一緒に話せるように早く適当な男と付き合いなさい、というのが麗のいつもの仕上げ文句だ。

すきじゃない（前書き）

奏のきょうだい
・長男：地人（つちと）
・次男：天翔
・長女：奏
・三男：海音（かいと）

となっています。
上から、社会人、高三、高一、中二です。

すきじゃない

「遊さん、これ。ありがとう」

後日、私は直接遊さんに借りた本を返しに来ていた。
借りる時は人経由でも構わないが、さすがに返す時は直接でなければ失礼だ。

「ああ、もう読んだのか」
「うん、楽しかったよ」

私の言葉に微かに微笑む遊さん。

「それはよかった」
「じゃあ、ありがとう」

やはり私はそそくさと立ち去る。
遊さんと関わると共に、ここは三年生の教室。
一年の私にはあまり居心地がいいとはいえない。

「かな！」
「天翔！」

朝練が終わったのだろう兄の天翔が教室に現れた途端、私に抱き着いてきた。

「かな、おはよ！オレに会いに来てくれたの？」

確かに朝練に出るため、家を早く出る天翔と会うのは、昨日の夜振

りだ。
しかし毎日顔を合わせている妹にこの態度はなんだろう。
シスコンにもほどがある。

「離れてよ。天翔に会いに来たわけじゃない」
「えぇ～っ！？じゃあなんでかながうちの教室にいるんだよぉ」

口を尖らして文句を言う天翔に、教室にいた女子の先輩から黄色い歓声が上がる。
カワイイって、高三にもなる男の仕草として間違ってないか？
私はげんなりしながら、天翔から離れる。

「遊さんに借りてた本を返しに来ただけだ！」
「遊に？かなと遊ってそんな仲っ！？」

どんな仲だ。
本を貸し借りするなんて、ただの知り合い……友人だろう。

「天翔、そろそろ離してやれ。ショートに奏が遅れるぞ」

後ろからかかった声に振り向けば、遊さんがこちらを見ながら呆れた顔をしていた。

「うわ、ホントだ！」

時計を確認すれば既にＳＨＲが始まるまであと十分に迫っていた。

「じゃあ私行くから！」
「あ、かな！待って。今日お昼いっしょに食べよ！」
「え！？なんで天翔と……」

走り出そうとした足を思わず止める。

「兄貴の誕生日、来週だろ？打ち合わせ！」

一番上の兄は既に働いているが、うちからは出ていない。
だから、家族の誕生日にはいつもきょうだいでサプライズをするが、家で話すことは出来ない。中学の時は弟である海音と話し合っていたが、今年は私と天翔が同じ学校だから、私たち二人が主催だ。

「そっか！わかった。どこ行けばいい？」
「中庭の噴水近くに集合で」
「オッケー、じゃあ私もう行くから！」

天翔と話していたら、本当にやばい時間になってしまった。
慌てて駆けて、なんとかギリギリＳＨＲに間に合うことが出来た。

昼休み――

「私も行っていいの？」

私は、ちょっと困り気味に首を傾ける麗の腕を引っ張って中庭に向かう。

「むしろ来て！高校生にもなって兄貴と二人でお弁当☆なんて、笑えない」

よく考えたらそうなのだ。

朝は急いでたこともあって、深く考えずに返事したけど、妹の私から見てもシスコンの天翔と二人で昼飯なんて、ぞっとする。

「まぁ、奏がいいなら、私はいいけど。邪魔じゃないかしら」

「大丈夫！天翔も麗のことは妹みたいに思ってるし」

麗とは小学生の頃からずっと一緒だ。

うちによく遊びに来てたこともあって、麗はうちのきょうだいと仲がいい。

「たか君と話すのは久しぶりだわ」

天翔指定の場所に着いたけど、まだ天翔はいなかった。

私達は授業が少し早く終わったし、三年の教室よりも一年の教室の方が中庭に近い。

とりあえず、適当なベンチに座って、天翔を待った。

「ねぇ、奏。あれから真田センパイとはどうなのよ？」

またか。

私はうんざりとしながら、麗を見る。

「だーかーらー、何もないってば。今日も普通に本返しただけ！」

「ふうん。でも本貸し借りするくらい仲がいいのよねぇ」

今日はこの話ばかりだ。

天翔も麗もやたらと気にするが、本の貸し借りってそんな重要？

「別にともだちなら普通じゃん」

「友達ねぇ」

「何よ！？」

麗のうたぐり深い視線に少し苛立つ。

「だって私達は一年で、真田センパイは三年生よ。しかも面識があったとはいえ、まともに話したのは四月になってから。それでトモダチ？」

「わ、悪い！？」

「悪くはないけど、疑いたくなるわ～。そこに他の気持ちが無いのか」麗のからかう口調と笑みにかっとなる。

「だから、遊さんのことは好きじゃない！苦手だっつってるだろ！！」

勢い立ち上がりながら叫んでしまった。

中庭にちらほらといた人の視線が気になるが、恥ずかしさで周りに気をする余裕がない。

その中で唯一視界に入る真正面の麗の顔が驚きで固まっていた。

少し青ざめてるのは気のせいか。

「奏……センパイが」

麗の口から出た言葉にバッと後ろを振り向けば、気まずげに足を止めた天翔と、その横で表情の無い遊さんがいた。

「遊、さんっ！？」

声が掠れて裏返る。

まさか本人がいるなんて……。

遊さんは少しだけ口角を上げて、ふっと笑うと、こっちをもう一度見る。冷たい、鋭い視線に体が固まる。

「立ち聞きするつもりはなかったが、奏の気持ちはわかったよ。天翔の妹だからって関わり過ぎたみたいだな。それじゃあ」

ひらっと手を振って踵を返す遊さん。

「へぁっ！？遊、ちょっ、待て！」

固まったままだった天翔が、遊さんと私をキョロキョロと見比べる。体を遊さんの方へ向きながら、天翔はキッと目線を強くして私を見る。

「奏、今日帰ったら説教！！兄貴のはまた明日なっ！」

それだけ言って天翔は遊さんを追い掛けて行った。

「奏、ごめん……」

麗の方を見れば、申し訳なさそうな顔。
いつも自信に溢れてる麗には似合わない。

「なに、が？」

「……泣きそうな顔してる」

そう言われて始めて気付く顔の強張り。

なんで、なにが、どうして。
泣きたい理由が自分でわからない。

うんがない

あれから、遊さんとはまともに顔を合わせていない。
天翔には謝るように言われたし、自分でも謝らなければとは思う。
だけど気まずいのもあるし、会おうとしなければ、1年と3年とでは、顔を会わす機会がないのもあって踏ん切りがつかない。

家に帰ってきて、自分の部屋でゴロゴロとしながら、溜息をつく。
もう4日だ。
謝るにしても今更な感もあって、余計謝りにくい心情だ。
ノックの音が響いて、私は返事をする。

「カナ姉、今いいか？」

弟の海音がドアからひょっこり顔を出した。

「なに？」

体を起こして、海音を迎えれば、海音は後ろ手にドアを閉めながら、部屋に入ってきた。

「いやー、ホラ、もうすぐツチ兄の誕生日だろ？」

どこかモジモジとしながら言う弟を胡乱げに見遣る。
昔の可愛いげがあって、私を見上げてた頃ならまだしも、既に私の身長も越した、見た目だけは成人男性な弟にやられると正直言って寒気がする。

「それが？もう何あげるか決まったじゃん」

「そ、そうなんだけど」
「早く言えよ」
決心したというように、バッと顔を上げた海音は、少し顔を赤らめて口を開いた。
「あのさ！遊サン連れて来いよ！」
「……は？」
思わず私はぽかんとしてしまった。
何で今その名前が出てくるんだ。
「母さん達には許可とったから、大丈夫！ツチ兄も珍しく遊サンのことは気に入ってるじゃん？だから、ツチ兄の誕生日、遊サン連れて来いよ！」
目を輝かせながら言う海音に、プチッと音がした。
「アンタ誰に向かって命令してんの？人にモノを頼む態度っていうものがあるでしょ！？だいたいなんで私が！」
「だってしょうがねーだろ！タカ兄が帰ってくんの遅くて、もうツチ兄いるから頼めねーんだもん！いいじゃん、カナ姉だって同じ高校なんだから！！」
「だから口の聞き方！」
「すみませんデシタ！お願いシマス！これでいいだろ！？」
「イヤ」
「ちょっ！せっかく人がちゃんと頼んでんのに！」
どこがちゃんとだ、と口には出さずに文句を言う。
今正にその人物について悩んでいるのに、何事もなかったように誘

えるかっ！

「オレ頼んだからな！連れて来なかったら、カナ姉のこと恨むから！！」

それだけ言うと、海音は大きな音を立ててドアを出ていった。
いや、待て。
私は約束してない。
閉まった扉に伸ばしかけた手を下ろし、溜息をついた。
最近溜息が絶えない。
幸せが駆け足で逃げていってる気がする。
そういえば、海音は遊さんに憧れていたな、と今更ながらに思い出す。
遊さんは中学までは天翔と一緒にリトルリーグで活躍していた。
中学最後の試合で怪我をして、高校は野球を諦めたらしいが、天翔の応援に試合を見に行って、同じく野球をやっている海音は遊さんのプレイに感動したらしい。
しかも頭も良くて、何度か勉強を見たりしてもらっていた。
だから遊さんとは中学は違うが、その頃からうちに遊びに来ていたこともあって、うちの家族とは良好な関係だ。
私は野球をやっていないし、勉強も野球バカの天翔と海音ほど出来ない訳じゃない。
だから遊さんがうちに来ても、私は挨拶をして少し話す程度の仲だった。

海音のお願いはどうしようか。
別に無視をしてもいいのだが、せっかくだ。
この機会にこの間のことを謝って、つち兄の誕生日に誘おう。
仲直り……という程の仲があるのかはわからないけど、きっとそれが一番いい。

「って決意したのにねぇ」

左手を頬に当てて仕方ないという視線をくれる麗を私は恨みがましく見る。

「だ、だって」

結果は尽く惨敗だった。

謝ろうと決心したのが金曜日。

さっそく月曜の朝、三年の教室に向かったのだが、遊さんの姿は見当たらず、昼休みも放課後もいなかった。

帰ってきた天翔に聞くと、どうやら風邪を引いて明日も休むということらしい。

さすがに家まで押しかけるのは無理だし、第一家の場所を知らない。

三日目、回復したという話を聞いて、昼休み尋ねると、生徒会の仕事で教室にはいなかった。

放課後は、まだ完調したわけではないから早々に帰っていったらしく、会えなかった。

四日目、昼休みに行こうとしたら、先生に手伝いを頼まれて、時間が潰れ、放課後はＨＲが長引いたせいで、やっぱり会えなかった。

五日目、もう今日がラストチャンスだった。

今日がつち兄の誕生日。

夜にご馳走とケーキを食べて祝う予定だ。

なのに、昼休みに三年の教室に行くと、今度は遊さんが先生の用事でいなかった。

意気消沈して帰ってきた私に麗の言葉が突き刺さる。

「運が無いと言うか、巡り会わせが悪いと言うか」
「謝れないまま一週間以上経っちゃったよ。誘えてもいないし」
「海音くんに恨まれるわねー」

面白がる口調の麗を睨むが、全く効果はなく、ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべる。
それすら様になるなんて、ホント美人は厭味だ。

「アイツ地味な嫌がらせしてくるから凹むんだよな」
「まぁまだ放課後もあるしねぇ。頑張りなさい」

人事だと思ってと、言えば、人事だものと返ってきて黙り込む。
麗に口で勝てた試しがない。

きらいじゃない

放課後――
最後のチャンスだ。
今日は先生に呼び止められることもなく、ＳＨＲも時間通りに終わった。
足早に３年の教室に向かう。
たどり着いた教室の中を覗いたけど、遊さんも天翔も見当たらない。
どうしようか思案する。
他に見知った先輩もいないから、話し掛けることもできない。
生徒会室にでも行ってみようかと、踵を返す。

「ねぇ、久住さん」

教室に背を向けた私に、中から声がかかって振り向く。
三年の女子の先輩が五人。
固まって私を見ていた。

「なんですか？」

にっこりと笑みを浮かべる先輩方は、あまり穏やかな気配を感じない。
嫌な空気に負けないように平然とした声を心掛けた。

「ちょっといいかしら？」

私と三年の先輩たち。

人気のない校舎裏で向かい合う。
相変わらず先輩たちは笑みを浮かべているけど、あまりいい気分じゃない。
「単刀直入に言うわ。真田くんに付き纏うのやめたら？久住くんの妹だからって、ちょっとでしゃばり過ぎよ」
中心に立つキレイにメイクした先輩が、キツイ口調で言ってきた。
「そうそう。相手にされないんだから、諦めたら」
同調するように横にいた先輩がニヤニヤと笑う。
私は先輩たちの言葉の意味がわからず、首を傾げる。
「諦める？」
私の疑問に先輩たちは一瞬キョトンとした後、声を上げて笑い出した。
甲高い笑い声は少し耳障りだ。「だってあなた真田くんのこと好きなんでしょ？無駄だからやめときなさい」
はっ？
「真田くんは誰にでも優しいから勘違いしちゃったのよね」
マヌケな問いは声にはでてなかったらしい。
先輩たちが私を気にせず続ける言葉に、私は頭が混乱する。
私が遊さんを好き？
優しいから勘違い？

何を言って……

「でも彼、副会長の日向さんと付き合ってるのよ」

真ん中の先輩の言葉に、思考が停止する。
副会長の日向センパイ。
美人で優秀だと有名なヒト。
遊さんと付き合ってる……？

胸が切り裂かれたように痛みだす。
なんで？

「知らなかったのね。かわいそう」

クスクスと笑い合う声にかっと頬に朱が上る。
恥ずかしい！……？

「もう付き纏わない方が懸命よ。じゃあね」

言いたいことは言ったとばかりに先輩たちが去っていく。
遊さんが日向センパイと付き合ってる。
私が遊さんを……好き？
遊さんを……

「す、き」

かぁっと体に熱が点る。
顔が熱い。
きっと真っ赤だ。
こんなことで自覚するなんて。

私は遊さんを好きなんだ。

「でも……」

ヘナヘナとその場に座り込む。
目に潤みを感じて、必死に押し止める。
失恋することで自覚するなんて。
自嘲の笑みが漏れる。
なんて滑稽なんだろう。

かなり長い時間が経っていた。
私はふらつく足を叱咤して帰り道を辿る。
自分のことが馬鹿みたいだ。
あんなに麗の言葉を否定して、それで遊さんとギクシャクまでしたのに、今更気持ちを自覚するなんて。
しかも既に向こうは彼女持ち。
なんて馬鹿なんだろう。
泣けてくる。
家に帰ってすぐに自分の部屋のベッドに倒れ込む。
ホントに馬鹿だ。

下が騒がしくなって目が覚める。
いつの間にか寝ていたらしい。
重い体を起こすと、制服はしわくちゃだ。
すぐに脱いで、私服に着替えると部屋を出る。

「タカ兄ナイスッ！」

「そっかぁ？」

海音と天翔のアホっぽい声が部屋に響く。
もう天翔が帰ってくる時間か、と思ってはたと気付く。
そうだ。今日はつち兄の誕生日じゃないか。

「遊さん……」

誘うの忘れた。

「お邪魔して悪いね、海音くん」

「え」

階下から聞こえた声に思わず声が漏れる。
今まさに思い出した人物の声。
会いたくて、会いたくないヒト。
幻聴？
私は何と無く音を立てないように、階段を下りる。
階段を下りればすぐに玄関だ。

「さぁ上がって上がって！」

海音との嬉しそうな声が響く。
私の視界に入ったのは、満面の笑みの海音と、風呂行ってくるーと
呑気な声の天翔と、穏やかに苦笑する……遊さん。

「あ、カナ姉！ちゃあんと誘ってくれたんだな！！」

海音が私を見つけて話し掛けてきた。

その言葉に後ろで天翔と遊さんが首を傾げる。

「かなが誘った？誰を？」

天翔の声が幾分低くなったのは気のせいだろうか。

「もちろん遊サンだよ！オレがカナ姉に誘うよう言っといたんだっ！」

やたらと上機嫌な海音の言葉に二人はさらに首を傾げる。

「遊を誘ったのはオレだぞ」

「奏には誘われてないよ」

二人の声が重なり、今度は海音が首を傾げ、三人が私を見る。

「う……あ、の、その」

いろいろと決まりが悪くて言葉が出てこない。

本当は誘うつもりだったとか、謝ることだってまだしてないしとか……す、好きだって気付いて、失恋して、頭が混乱してたとか。頭の中には言葉が溢れてるのに、声にならない。

「えぇ！？カナ姉誘ってないのー？じゃあやっぱオレの頼み聞いてくれなかったんだ」

海音が口を尖らす。

いいじゃん！結局遊さん来たんだから！

というのは心の中だけにする。

「へぇ」

微かに聞こえた声にばっと顔を上げる。
遊さんが冷めたような視線をこっちに向けていた。
胸が痛い。
いくら失恋決定だからって、まだ自覚したばかりのコイゴコロ。
好きな人に冷たい目で見られるのがこんなに苦しいなんて。
何だか泣きそうだ。

「何してるんだ？」

4人でぎこちない空気になっていた場に、玄関の扉が開く音と共に、
不思議そうな声がかかって、はっとなる。「ツチ兄！」
「おかえり～」
「お邪魔してます」

海音、天翔、遊さんの順で帰ってきたばかりのつち兄に声をかける。

「ただいま、奏」
「おかえり、つち兄」
「えっ、オレら無視！？」
「あぁ、ただいま。いらっしゃい、遊」

いつものことだ。
つち兄は穏やかな笑みをいつも浮かべているヒトで、満面の笑みで
私を見た後、素っ気なく3人にも挨拶を返す。
相変わらずだが、客がいるのにそれというのもどうだろうか。

それぞれが準備を終え、リビングに集まったら、つち兄の誕生日祝いが始まった。
ガヤガヤと騒いで、母特製のご馳走を食べ、私たちからはプレゼント。
遊さんも天翔に急に誘われたらしいが、帰りがけに買ってきたらしいプレゼントを用意していた。
ケーキも食べ、満足したところでお開き。
母と海音が皿洗いをして、天翔と私でテーブルの上の片付けだ。
父は出張中で一週間前からいない。
主賓のつち兄とお客さんの遊さんにはリビングで寛いでもらっている。

「もうこんな時間なのねぇ。遊くんお家の方は大丈夫かしら」

皿洗いを終えた母が遊さんに話し掛ける。
確かに高校生が歩くには十分遅い時間になっていた。

「家の方には連絡してありますが、そうですね。そろそろお暇させて頂きます」

遊さんがにこりと笑いかけながら立ち上がる。

「ごめんね、送っていけなくて」

母もつち兄もさっきの席で酒を飲んでしまっていたのだ。
だから車で送ることができない。

「大丈夫です。まだ電車もありますし。こちらこそお邪魔してしまって」

遊さんはすごくしっかりと母と会話する。
かっこいいな、なんて胸が高鳴る自分にツッコミをいれたくなる。
どんなオトメだ！

「今日はありがとうございました。改めて地人さんはおめでとうございます」
「あぁ、ありがとう」
「じゃあ気をつけてね」
「はい、お邪魔しました」

玄関で一家総出で見送り、遊さんは帰っていった。
みんなが部屋に戻ろうとする中で、天翔が私の肩を掴んで呼び止める。

「奏」
「な、に？」
「お前結局遊に謝ってないだろ」
「……」
「今謝ってこい！」

天翔に声の勢いそのまま背を押され、ちょっとよろめく。
確かにチャンスかもしれない。
この一週間ホントに運がなかった。
これは巡ってきたチャンスだ。
ちゃんと謝って、ギクシャクした関係を戻そう。
好きだと伝えることは出来ないけど、気持ちの整理がつくまでは側にいられるように、少しだけ仲のいい先輩後輩になれるように。

「行ってくる！」

私はサンダルを足に引っ掛けて家を飛び出した。
左右の道をキョロキョロと見回して、まだ歩き始めたばかりの遊さんの背中を見つける。
「……遊さん！」夜なのであまり大きくならないよう、でも相手に届くように名前を呼ぶ。
すぐに遊さんは足を止めて振り返る。
駆ける。
そんな距離もないけど、なんだか走りたい気分だった。
短い距離はすぐに追いついて、でも急な全力疾走に上がった息を整える。

「奏、俺何か忘れた？」

名前を呼ばれると鼓動が大きくなる。
目が合うと顔が熱くなる。
あぁ、こんなにも好きなんだ。
どうしてこの気持ちに今まで気付かなかったのかが不思議なくらい私は全身で遊さんを好きだ。

「あの、ごめんなさい！」

整った息をそのまま頭を思いっ切り下げて謝る。

「は？」

私のあまりの勢いに遊さんは呆気にとられた声を出す。

「あの、先週、遊さんのこと、その傷付けましたよね、私。ずっと謝りたくて」

「傷付け……」
「一週間ずっと謝ろうとしてたんだけど、なんかタイミングが合わなくて。昼休みとか放課後に会いに行ったら、遊さんがいなかったり、先生にモノ頼まれたりして……一回も会えなかったんです」
「だ、だから、海音に言われて、今日のことも誘おうとしたんだけど、ダメで、って何か言い訳ばっかですね。ホントにごめんなさい！あの、あれは売り言葉に買い言葉というか、つい口に出ただけで、ホントに思ってる訳じゃないというか……」
あぁ、もう自分で何を言ってるかわからない。
クスと笑い声が聞こえて、俯いていた視線を上げると、遊さんが前みたいに穏やかな顔をして笑っていたものだから、また胸が高鳴る。
ホントに、どうした自分！
「わざわざありがとう。そんなに気にしててくれたんだ」
なぜにお礼を言われてるんでしょう？
「俺は奏のこと嫌いじゃないよ」
そう言って、微笑みながら私の髪を軽く梳く遊さん。
「今日はありがとう。ご家族にも伝えてくれるかな」
私はぎこちない動きで頷く。
身じろぎする度に遊さんの指が、手が、顔に当たる。
「それじゃあまた、学校でね」
ぽんと最後に頭を撫でて、遊さんは踵を返して歩き出した。

私は急な事態に固まって、言葉を発することもできずに遊さんの背中を見送った。

顔が熱い。
きっと真っ赤だ。

“嫌いじゃないよ”

きっとそれに他意はない。
それなのに錯覚してしまいそうな自分に歯止めをかけるのは、難しかった。

きらいじゃない（後書き）

自覚と同時に失恋って哀しいですよね。

女の先輩達は、奏が男子生徒を病院送りにしたことは知ってますが、女子には手を出さない主義なことも噂で聞いてます。

しかももし手を出されても正当防衛を主張しようと画策していたり……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1839v/

Nothing

2011年10月9日10時27分発行